

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山国際大学子ども育成学部子ども育成学科
- ・所属ゼミ 河崎美香ゼミ
- ・指導教員 河崎美香
- ・代表学生 城崎菜々美
- ・参加学生 金山すずな 濱帆南 矢後芽生 谷内美咲

【研究題目】 新人保育者の保護者支援に対する困難感

1. 課題解決策の要約

近年、保育士不足が大きな問題となっている。厚生労働省(2020)によると、令和2年時点で保育士全体の離職率は9.3%、さらに横山・重松・増淵・柴田(2016)によると卒後1年目の新人保育者の離職率は15.4%であり、全体の離職者に対して1年目の離職の割合が大きいことが指摘されている。保育の質の向上を図るには、保育者数の確保が必要である。そのためには、一人一人の保育者の困難感に寄り添い、長期的に保育できる環境形成が求められる。入江(2013)は、新人保育士に対するインタビュー調査により、3歳未満児の新人保育士が感じる保育の難しさとして、『保護者への対応の難しさ』を挙げている。そこで本研究では、新人保育者の保護者支援に対する困難感に焦点を当て、県全域の新人保育者を対象にアンケート調査、インタビュー調査、実際に新人保育者が保護者支援を行っている保育現場の現場観察を実施した。

2. 調査研究の目的

保護者支援に対する新人保育者の困難感の要因を明らかにし、新人保育者が長期的に勤められる職場環境の形成における具体的な方向性を提示することを目的とした。

3. 調査研究の内容

今回の研究は、富山県全域で行ったアンケート調査とインタビュー調査の結果と文献を基に今後の方向性を提示したものである。各調査概要は以下のとおりである。

3-1 アンケート調査概要

調査対象:保育施設に勤める1年目保育者80名

調査期間:2023年2月13日(月)~2023年3月17日(金)

調査方法:対象の保育者が勤める保育施設宛てに本調査の目的を示した書面を郵送し、一緒に添付したQRコードからMicrosoft formsでアンケートに回答を求めた。

3-2 インタビュー調査概要

調査対象:アンケート調査より、インタビュー調査への同意が得られた保育者7名

調査期間:2023年8月~9月

調査方法:所要時間30~40分程度の半構造化面接を実施し、用意したインタビューガイドに沿って進め、ICレコーダーに録音した後、逐語記録を起し分析した。

4. 調査研究の成果

4-1 アンケート調査より

保育士養成校を卒業した保育者1年目にアンケート調査協力を求めた回答結果について示す。なお、配布数80に対し、53の回答が得られた。(回答率66.3%)

以下、抜粋してアンケート結果と考察を示す。

(1) 現在の立場、担当する子どもの年齢

質問項目にて、「担任・副担任・学年主任・フリー・その他」という項目を設けた結果、担任と回答した人が36人(67.9%)であり、新人保育士であっても担任を任される機会が多いことがわかった。また、「0歳・1歳・2歳・3歳・4歳・5歳・その他」と担当する子どもの年齢の項目を設けた結果、0～2歳児を担当する新人保育者は44人(83%)であることから、低い年齢の子どもを担当する新人保育者が多いことがわかった。

(2) 保護者支援に対する戸惑いや難しさ

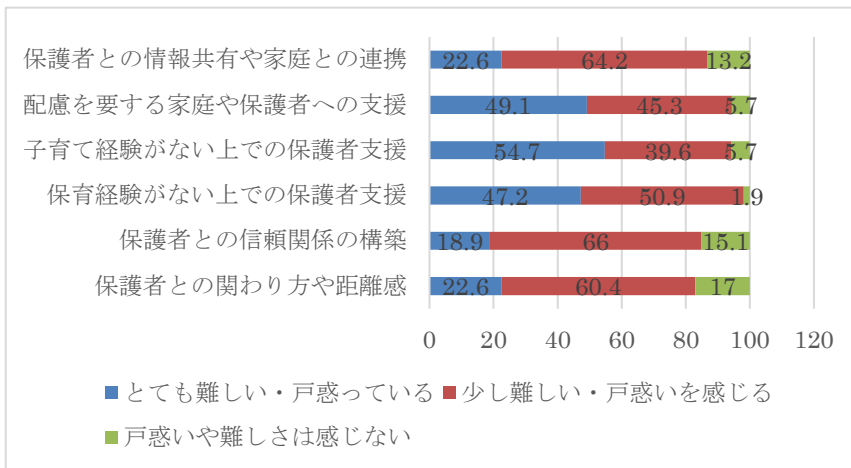


図1 保護者支援に対する困難感

保護者支援に対してどのようなことに戸惑いや難しさを感じるかについて問うたところ、「配慮を要する家庭や保護者への支援」、「子育て経験がない上での保護者支援」、「保育経験がない上での保護者支援」の項目で半数近くが該当するという回答結果(図1)であった。この結果から、新人保育者の困難感、自分の経験の浅さからくる自信のなさによって

生じていると考えられる。また、「保護者との信頼関係の構築」、「保護者との関わり方や距離感」に関しては、保護者とのコミュニケーションにおいて、いかなる方法を取れば信頼関係を築くことができるかを明らかにすることが、戸惑いや難しさの軽減につながるのではないだろうか。保護者支援を行うにあたり、保育者と保護者が互いに信頼し合える関係性であることは非常に大切である。

図2は、図1にて「子育て経験がない上での保護者支援」という項目に「とても難しい・戸惑っている」と回答した保育者の、担当年齢別人数を示している。このことから、3歳未満児を育てる保護者への支援に対して困難感を抱いていることが分かる。また、「(5)学生時代にもっと学んでおけばよかったこと」という項目では、約4割の新人保育者が「乳児保育」と回答した。これらの結果から、保護者支援の困難感の一要因として、3歳未満児の保護者支援が浮かび上がってきた。

3歳未満児特有の専門的な知識、技術とは何か。一例として、産後の情緒に関することや親子関係、保護者が抱く子育て観などが挙げられる。保育士養成校での授業では、保育施設における保育内容

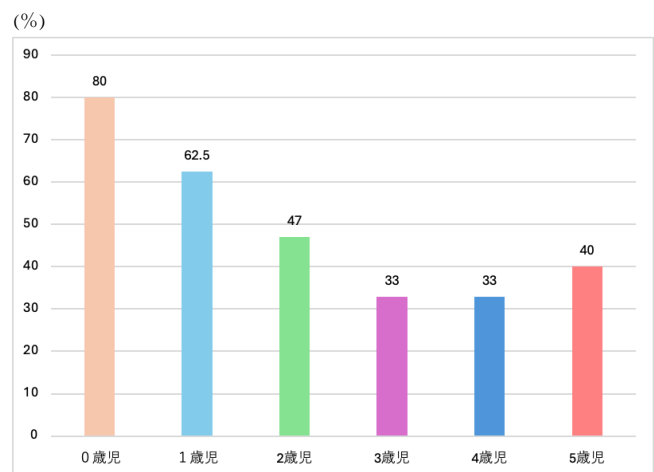


図2 「子育て経験がない上での保護者支援」という項目に「とても難しい・戸惑っている」と回答した保育者の、担当年齢別人数

や方法について学ぶ機会が多いが、家庭における子育てについて触れる機会は少ないように感じる。3歳未満児を担当する新人保育者が質の高い保護者支援を行うには、保育の知識や技術に加え、家庭の子育てに関する知見をさらに深め、保育施設内と家庭の両方の分野の支援力を高める必要があるのではないか。

(3) 保育者から寄せられた保護者からの相談内容

相談内容を整理すると、食事、発達、排泄、保育施設での生活に関する相談が多いことがわかった。

○食事に関する相談 ・好き嫌いが激しい ・偏食で、野菜を食べない	○排泄に関する相談 ・トイレトレーニングの進め方がわからない ・夜のオムツが取れない
○発達に関する相談 ・言葉が出てこない ・自分の子どもが多動ではないか気になる	○保育施設での生活に関する相談 ・保育施設での子どもの様子が気になる ・家庭と保育施設での様子が相違がある

図3 保育者から寄せられる保護者からの相談内容

この結果から、保育者からの相談内容は多様で、新人保育者であっても保護者からは保育の専門家として回答を求められていることがわかった。さらに、インタビュー調査の結果(図6)から、保護者と保育者が保育施設内で行うコミュニケーションは5分程度であることが示された。このことから、限られた時間の中で保護者の幅広い相談に適切に対応する知識や技術が求められていることを、新人保育者は負担に思い、そのことが困難感の一つの要因になっていることが推察できる。

(4) 困った時の相談相手

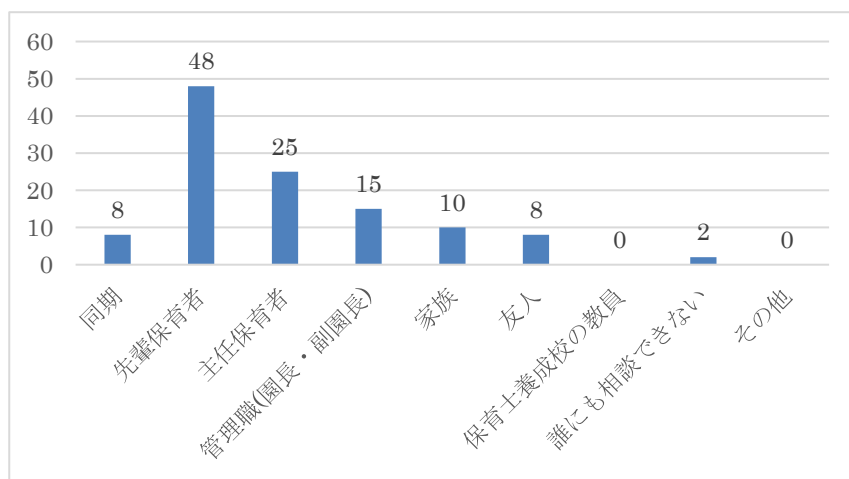


図4 困った時の相談相手

困ったときの相談相手として、「先輩保育者」という回答が最も多く、次いで「主任保育者」、「管理職(園長・副園長)」という結果となり、一緒に勤務する上司に相談する機会が多いことがわかった。また、インタビュー調査において、「(相談相手には)何か答えや助言がほしいわけではなく、吐き出したかった」と答える新人保育者がいたことから、新人保育者にとっ

て困難感を受容してもらえ環境が重要であることがうかがえる。

一方で、「誰にも相談できない」と回答した新人保育者もいた。困難感を抱える新人保育者にとって、それを相談できる相手がいないことは、退職したいと感じる要因の一つになると考える。谷口(2023)は、「新任保育者に求められるのは、ストレスのレベルを最適な状態にコントロールする力」と述べている。信頼できる人に話すなどしてストレスを軽減させ、職場で多様な人々と協働するストレスコントロール力を身に付けることが、長期に渡って保育に携わる上で重要な要素になり得るのではないかと考える。

(5) 学生時代にもっと勉強しておけば良かったこと

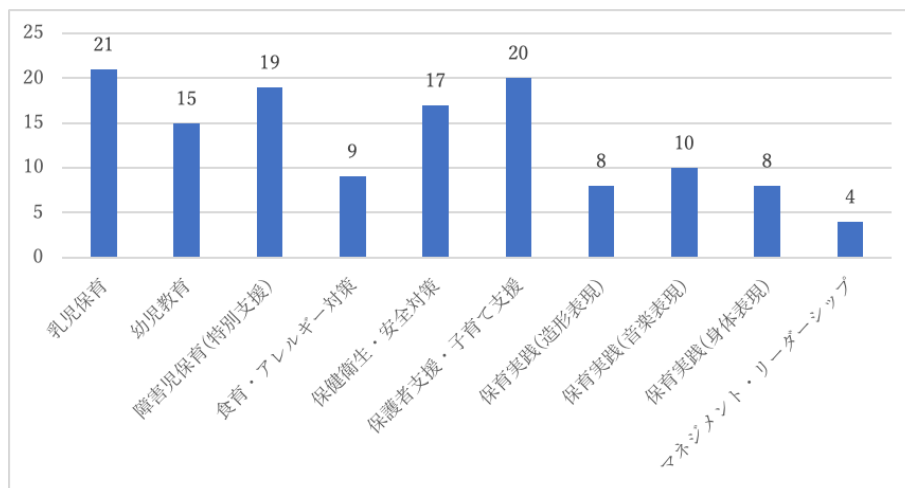


図5 学生時代にもっと勉強しておけばよかったこと

多く挙げられたのは「乳児保育」「保護者支援・子育て支援」「障害児保育(特別支援)」であった。これらに共通するのは、個別性が高く、多様で、柔軟性が求められるという点ではなかろうか。この場合にはこれをすればいいという画一的な方法だけでは解決できず、多種多様な保育ニーズに応じて、臨機応変に支援する保育力が求められるように考える。

4-2 インタビュー調査より

「保護者と関わるうえで、どのようなときに戸惑いや難しさを感じるか」という質問項目への回答に関するものを一部抜粋して以下に示す。

(1) エピソード1 A 保育者

「自分の保育経験が少なく、子育て経験がないので(保護者に)相談された時に困った。クラスにすぐに手が出てしまう子どもがいるのだが、その子が三日間連続で友達に手が出てしまうことがあった。それを保護者にお伝えした時に、保護者が困っていらっしやる様子で、『どうしたらいいのですかね』と聞かれて、助けてあげたいのだけれど、良い言葉が見つからず、とても戸惑った」



写真1 新人保育者へのインタビュー

【保育者が行った支援】

その場で保護者に対して「見守っていくしかないですよ」と言葉をかけるのが精いっぱいだった。

回答者の感じる困難感の背景には、自身の保育経験の少なさや子育て経験が乏しいことがあった。前述(図1)したように、保育経験や子育て経験が少ないことから困難感を感じている新人保育者の割合は高い。実際の保育現場では、保育士養成校における座学や演習を超越した様々な悩みや相談を持ち掛けられる。その中で保護者の不安に寄り添いながらも適切な助言が求められるため、新人保育者が自分の保育力に危機感を覚え、困難感を感じてしまうのではないかと考える。

しかし一方で、野中(2019)は、新任だからできる保護者支援として、「保護者は、『わが子』が担任から大切にされているかどうか最大の関心事」と述べている。新人保育者は、その子の保育施設での様子やできるようになったことを丁寧に情報提供することで、保護者との信頼関係を築き、ひいては、そのことが新人保育者の困難感の軽減につながっていくのではないかと考える。

(2) エピソード2 B 保育者

「保護者によって性格や家庭環境も違うので、どのように対応したらよいかわからなくなる時がある。保護者によっては怖そうな雰囲気の方がいらっしゃるの、緊張してしまうこともある。」

【保育者が行った支援】

なるべく丁寧に失礼のないように、事前に言葉を考えている。また、主任保育者からどのように伝えたらよいか助言をもらっている。

回答者は、保護者の求めに的確に応じ、良好な人間関係を築いていくことに対する困難感を抱えているようであった。新人保育者は着任してすぐにクラスの子どもの保護者とやりとりすることが求められる。自身より年上の保護者がほとんどであり、その点から不安を感じる事が予測される。永井(2021)は、「組織的に互いに支え合い、エンパワーしていくことで、関係性や同僚性を発揮したチーム保育を行うことの意義が高い」と述べており、保育現場はチームとなって協働することが求められると言えよう。先輩保育者が保育現場経験から培った知識や技術を新人保育者と共有し、共に支援方法を模索する機会があることで、適切な保護者支援、新人保育者の困難感の軽減に寄与していくのではないだろうか。

(3) 保護者と対面コミュニケーションを取る場所、時間、その他のコミュニケーション方法について

	場所	時間	その他のコミュニケーション方法
A 園(5 歳児)	玄関	数分程度	連絡帳
B 園(2 歳児)	玄関	一対一の場合は時間をかける 混雑時は挨拶程度	連絡帳
C 園(2 歳児・1 歳児)	保育室前	1 分から 5 分程度	連絡帳
D 園(4 歳児)	玄関	1 分から 3 分程度	連絡帳
E 園(1 歳児)	玄関	1 分から 5 分程度	希望者のみ連絡帳
F 園(2 歳児)	保育室前	挨拶程度、5 分未満	ICT を用いたやり取り

図 6 保護者との対面コミュニケーション場所、所要時間、その他の方法

この結果から、対面コミュニケーションに関しては、保護者が子どもを迎えに来た際に顔を合わせやすい場所において数分で行われていることが多く、その他のやり取りは連絡帳がほとんどであることがわかった。また、F 園では ICT 上でのやり取りが行われていた。ICT の利用は情報共有の簡易化にもつながり、保護者とのコミュニケーションにおいて好影響を期待できると考える。一方で、中津(2020)は保育現場における ICT 活用の課題として、「ネットワーク環境の改善」や「ICT リテラシー問題」を挙げていることから、利用環境を整えることや、適切に利用できる技術を身に着けることが ICT 活用には求められる。利点と欠点を把握したうえで、手段の一つとして有効に利用することができるようになることは、保護者支援の環境改善につながっていくだろう。

また、写真 3 のように、一つの玄関を全ての年齢の子どもと保護者が共用するのではなく、年齢によって玄関先が異なる保育施設もあった。年齢によって玄関が異なることで一つの玄関から出入



写真 2 保護者とのコミュニケーションを取る玄関先

りする人が減少し、プライベートな空間の確保につながり、保護者との信頼関係を築きやすく、困難感の減少につながることを期待される。一方、密閉空間をつくることにもなるため、職員全体の共通理解と配慮が重要になると考える。

5. 調査研究に基づく提言

本研究より、新人保育者が困難感を軽減し、長期的に勤められる職場環境の形成における具体的な方向性を、以下に挙げる。

(1) 新人保育者の保護者支援の困難感を軽減する因子の一つに、保育施設内の人間関係がある

ことがわかった。石井・小林(2023)は、「職場の中に初任保育者を同僚として受け入れる素地があることは、初任者の不安を緩和したり、困難感を低減したりすることに役立つ」と述べている。信頼して協働できる関係性を築くには、勤務年数を問わない保育者同士の日常的な情報交換や報告などの積極的なコミュニケーションを定着させる必要があると考える。保育施設がチームとして動くことは新人保育者の困難感の軽減や保護者支援のみならず、より良い保育を実現するための基盤となるだろう。

(2) 保護者支援を実践していく上で、保護者との信頼関係の構築は欠かせない。永野・岸本(2016)は「保護者の不安を感じ取り、保育の専門性を生かし、一緒に子育てをしていこう、といったメッセージを送ることが信頼関係を築くための基礎となる」と述べており、限られた時間でのコミュニケーションにおいても、質を向上させていく必要があるのではなかろうか。入江(2013)は保護者支援について、「保育士養成課程では理論知で留まっている分野」とし、「実習における保護者との関わりは挨拶をする程度のものであり、本格的な関わりは保育現場に出てから」と述べていることから、その状況を保育施設全体で認識し、新人保育者が情報共有しやすいよう、場所や方法の工夫など、環境を整えることが必要であると考えられる。

(3) 新人保育者自身が常に学び続けることも保護者支援や困難感の軽減には大切である。社会情勢の移り変わりに応じて求められる保育も変容していく。保育士養成校で学んだことを保育現場で応用する力や、情報を基に思考し、実践する力が求められよう。しかしそれを一人で行おうとするとかえって困難感につながるため、保育施設内の同僚や上司、保育士養成校時代の友人や教員などともつながり、悩みを一人で抱えないことが肝要だと考える。何より、新人保育者を取り残さない環境を整えることが大切である。

6. 課題解決策の自己評価

今回の研究では、富山県全域の保育施設を対象にアンケート調査、インタビュー調査、環境調査を実施したことによって、新人保育者の困難感の傾向を把握し、新人保育者を保育施設全体でサポートしていく体制の見直しの方向性を提示した。保育者同士の人間関係の充実、保護者支援のみならずあらゆる保育の質の向上、そして新人保育者の保育に対するモチベーション維持、長期的に保育に携わりたいという熱意にも大きく影響すると言えよう。今後の保育をより良いものにしていくためには人手の充足は必須である。そのためには、どの立場の人がどのような困難感を抱えているのかを明らかにし、保育者自身のニーズにも応えられる環境を整えていく姿勢が大切である。

今後、多様で複雑なニーズに即した保護者支援に関する必要な知識・技術とは何か、さらなる調査を行い、子ども、保護者、保育者、全ての立場の人間が前向きに保育に携われる保育環境を実現できるよう、研究を深めていきたい。



写真3 3歳未満児玄関先